

ければ、其間に心安く御通行被成けり。此頃能き仕やう也とて何れも譽めたり。とあり。又同記に、大坂夏陣の時、梶川彌左衛門地白染の帷子の裾を切りて、羽織になして着し、能き馬に乗りて駆け廻りたる躰、一段見事なり。惣て武者道具の結構なるは、平家の公達のやうにてぬるく見ゆ。また野人の如く物あらき仕立は、賤しくても強みありて、武者ぶり物馴れて見事なりと、猪子九郎左衛門語るなり。とあり。按するに、大坂夏陣軍役覺書に、使番黒母衣衆の中に梶川彌左衛門とありて、三州志難繼餘考等にも、元和元年浪華の再役に、公金城出軍の時、使官梶川彌左衛門等二十五名を擧げたり。藩國官職通考に、微妙公の時は譜代の土を使番とし、新參の土をば金番取役とす。金番取役其の職大概使番に同じと書記に見ゆ。とあり。

○水天宮

此の社祠は、舊社に非ず。其の來歴は、金澤士族小嶋栗助の祖先小嶋小助といふ者、水天宮を崇敬の餘り、天和二年二月十五日筑後國久留米の本社より分靈を請ひ來り、己が邸内に勧請す。然るを要助に至り、彦三三番丁の邸内に初

て社祠を設け、る處、追々信徒人増加し、水天宮と稱し、衆庶參拜の儀を上願し、明治十五年一月十一日許可相成りたり。然るに此の地狹隘なるに依つて、彦三六番丁の共有地へ移轉の儀を更に出願し、同年三月十四日許可相成り、假殿を建築せり。其の祭神は安徳天皇・建禮門院・二位平時子の三靈神を合祀すと云ふ。抑、水天宮の號は十二天の中の水天なるよし。是を尼御前といふは、むかし文治元年三月廿四日、安徳天皇を奉抱入水せられし二位尼を祀り込めたりし故也とぞ。さるを文政元寅年の冬より、毎月五日を御縁日と號し、筑後國久留米藩有馬侯の江戸芝邸内に、初て水天宮の別社を建て、神靈を勧請せられしに、諸人の參拜夥敷、殊に此の水天宮の守札は、誠に奇々妙々たる靈驗にて、水難・火難を始めとして、諸病は勿論、其の外諸事に靈異いちじるく、殊に難産などには立處にその驗あり。實に神變不思議なる事は、世人の能く知る處にして、其の神異神驗のためし種々多しといへども、今悉く記すに迫あらずと、宮川舍漫筆其の外諸記録等に載せたり。筑後國久留米なる水天宮本社の來歴は、未だ縁起等を得ざれば詳かな

らず。

○主計町

元祿九年地子町肝煎裁許附に、主計町・母衣町と並べ載せたり。此の町は、淺野川橋脇より同一文橋の邊までを稱す。三州志來因概覽附錄頭註に、淺野川端を主計町と呼ぶは、富田主計居第の地邊なる故なりといへり。

○富田主計重家傳

重家は富田氏、名人越後守重政の長男也。後大炊又下野と稱す。新知一萬石を賜へり。慶長十七八年の土帳に、一萬石富田下野とありて、人持組頭たり。妻は宇喜多中納言秀家卿の息女にて、利家卿の孫也。故に利長卿養女となし、嫁娶の命ありといへり。但し、重家は父越後守に先達ちて歿せり。子なく、弟甲斐重康父の跡を繼ぎ、越後と改稱す。世人中風越後と呼べり。其の弟宗高は三千石を賜はり、主計と稱す。兄重家の名跡なりしかど、早世して子なく、跡斷絶すといへり。寛永四年の土帳に、三千石富田主計とあるは、是宗高なり。加州勢大坂軍役覺書と題號せし古寫本に、元和元年大坂夏陣鐵炮頭連名中に富田主計と載せられた

ど、三州志には記載せず。

○主計橋

金澤橋梁記に、かずへ橋淺野川大橋下也。とあり。此の橋は、内惣樺堀の下流、主計町より淺野川へ出づる往來橋を呼びたるもの也。

○狐橋

金澤橋梁記に、きつね橋主計町と母衣町との間。とあり。

○母衣町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、母衣町とあり。此の町は、淺野川橋下一文橋邊よりの町名なり。舊傳に云ふ。舊藩國初の頃、母衣衆とて歩行者あり。此の者其の居邸をば此の地にて賜へり。故に母衣町と稱すといへり。按するに、萬治二年十一月藩士居屋敷歩數定誓に、七拾歩宛五拾石より切米五拾俵迄御歩行者・母衣者・御算用者。五拾俵より内に而も此の歩數。とあり。

○母衣歩行者來歴

岡本慶雲が末森記に云ふ。天正十二年九月、越中佐々内藏助成政能州末森城を取巻き、利家卿後詰し給ふ時、御馬廻